# 新・レ○プ教師に
# 女子柔道部員が金責め制裁

玉子王子　著

一章　いくら強引なナンパされても、タマタマ蹴るなんて……

涼しい空気。サラリーマンや学生が行きかう駅。

巨乳少女が歩く。前から半分ぐらいの背丈の子供が歩いてくる。

友人と話して、あまり前を見ていない。

ぶつかりそうになる。

ブルン、と顔の前で揺れる肉塊に驚き、顔を赤らめる少年。

「うわっ、オッパイ」

「あっ」

ぶつかられかけ、さらにそのセクハラ発言に怒る顔も見せない。

むしろ子供相手に怖がるような表情さえ浮かべる少女。

そそくさとパスケースをかざし、改札口を出る。

足早に歩くと、ブルンと、控えめそうな雰囲気に見合わない自己主張の激しい肉塊が胸元で揺れる。

にや、とそれを見ていた男子生徒たちが笑う。

少し離れたところで、獲物を物色していた男たち。

ちゃんと制服を着ていない、あまりガラのいいとはいえない男たち。

この駅の近くにはいくつか学校がある。

その一つである、とある女子校の生徒が彼らの目当てだった。

――女子校だから、当然男子がいない。近場に男がおらず、彼氏持ちが少ないという意味もあるが……やっぱり、「身内の男」が近くにいると、強引なナンパはやっぱりやりにくい。いるだけで邪邪魔だ。それがないのはデカいぜ。

しょうもない計算をしつつ、ナンパを始める男たち。

「彼女ー、名前なんて言うの？」

「おい、なんだよお前、無視すんのかよ」

「このブスが！」

まず、実際に不細工と思える子に声をかけるのが彼らのやり方だった。

そしてさっさと「断られた」形を作って、怒鳴る。

ビク、と周りの関係ない少女らも体を強張らせる。

舌なめずりをする男。

――そうそう、ビビれよ。俺らを怖がれよ。俺らの誘い断ったら、怒鳴られちゃうよ？　いい顔しないとなあ。まあ、こんな脅しでいやいや付いてくる奴はいないが、大人しい奴が声かけた場合より、真剣に聞いてもらえる率は跳ね上がる。大勢声かけりゃ、気の合うやつも引っかかるってもんよ。へへ、ヤンキーが彼女持ち多い理由の一つが、こういうことができる、ってのもあるよな。

断られる確率そのものは下げられずとも、酷い断り方をされて傷つく確率は普通の者より格段に低い。それこそ、声をかけただけで「加害」扱いされかねないオタクの男子などとは比べられない有利な立場といえる。

そんなヤンキーたちが、巨乳の少女に目を付けないわけがない。

気弱そうならなおさらだ。

「ちょっと、そこのオッパイちゃん」

「おい」

「ちょっと、無視しないでよ」

「あ、そうだ、昨日もいたよね」

「当たり前だろ、近くの学校の生徒なんだ、制服でわかるだろ」

四人ほどの男子たち。

にやにやしながら、少女を囲もうとする。

眉をしかめるが、何もできない周りの女子たち。

と、一人だけ違う。

小柄な少女が間に立つ。

「嫌がってるだろ」

「なんだよお前」

「中学生か？」

「強引なナンパしやがって、みんな迷惑してんだよ。そんなやり方で彼女ができてうれしいか？　お前らがヤンキーじゃなくてさ、普通の男なら、お前らの値打ちじゃ彼女なんてできないよ。ほとんどお情け」

「こ、このガキ！」

わめき、掴みかかる。が、それより早く小柄な少女のほうが逆に掴みかかる。

襟袖を掴む。柔道。対応しようと動くヤンキー。ヤンキーながら、ちゃんと柔道の授業は受けている。

しかし少女の動きのほうが素早く鋭く、あっさり投げられそうな感じだ。

だが、少女は投げない。

投げる前に、ヤンキーが動きを止めた。

異様な叫びを上げて。

「はぐっ！」

動きを急に止め、顔をこわばらせる。

そして体をこわばらせたまま、投げ倒される。

技や素早さの問題ではなく、動かないので投げられた。

「うわっ！　お前！」

真っ青になる周りのヤンキーたち。

投げられたから、というのとは違う。

腰を引く。

彼らには、わかった。

仲間の異様な声の意味が。

なぜそんな声を上げたのか、見えた者もいた。

――あ、あのガキの足が……き、きん……

震えるヤンキー、と、それに目を向ける小柄な少女。

「んー、なんだ、なに震えてるんだ？　大の男が、ちょっと投げられたぐらいで……」

「榊部長……」

柔道部の部長だ。後輩で、部のホープである巨乳少女山下はパッと顔を輝かせる。

――助かった、先輩ならこんな奴ら……ううん、私もやらなきゃ。柔道なら絶対負けない、こんな脅かしてナンパしてるような人たちに……

両手をボクシングの構えのように胸の前に上げつつ、開く山下。掴むための柔道の構え。

それに気づくヤンキーたちだが、すぐに目は地面近くに向く。

転がった仲間に。

「おおおおお」

投げられたヤンキーが呻き、転がる。股間を押さえて体を丸めた。

その姿を見て、周りの少女たちがざわめく。

「え？」

「あれ？」

「やだ、ちょっとあの人、どこ抑えてんの？」

「そりゃあの場所は……その、お急所？　男の子の？」

「ちょっとちょっと、投げられた振動で「あぐううう、キャン玉あああ！」ってどんだけクソザコなのあの部分」

「いや、そりゃ衝撃が……きつかったんでしょうよ」

クスクスと噴き出しつつ、ちらちらヤンキーたちを見比べる周りの少女たち。

女子校近くだからか、不思議と制服の女子ばかり。

いくつかの女子校があるので、制服は割とバラバラだ。

それが、目の前で転がった態度の悪い男が、男特有のダメージを受けているらしいとみるや当然のように笑い始める。

顔を赤らめるヤンキーたち。

「な、なんだよ……投げられたせいじゃねえ、あいつの足が……」

「え？　うっそ、私の足が？　その、大事なところに？　当たってたの？　うっそ、ごめんなー」

口を三日月のようにして、笑えるだけ笑いつつ榊がしゃがみ、倒れた男の背中をなでる。

もちろん、わざと蹴った。

しかし嘲るように「事故」であるかのような言動をとる。

「あは、タマタマに当たってたんだ……　私の足が？　痛いんだよな？　タマタマ。急所だもんな。お急所。お急所。ザ・急所。あ、大丈夫だよ。私薬持ってるから」

身体再生用のナノマシン入りの薬。一粒飲めば一〇秒でどんな怪我でも再生する夢のような薬。それがコンビニで安く買える時代。

顔を真っ赤にする不良の耳元に口を近づける榊。

「金の玉潰れてたらいってくれよ？　大事な男のき・ん・の・た・ま、潰れてたら。一個でも二個でも、簡単に薬で治るんから。私知ってるんだ、中学時代は共学だったからな、よく男子と柔道して……あは、こうやってキンキン蹴っちゃったんだ。たまーに、潰れるんだよなあ。玉だけに！　ぎゃはははは！」

耳元で話しているが、別に小声ではない。

　周りの女子に丸聞こえだ。

「柔道で玉潰しって！」

「それどう考えても事故に見せかけて蹴ってるじゃない！」

「いやいや、タ〇キンの弱さを考えれば、純粋な事故で玉潰しもありうるって」

「キ〇タマ弱っ！」

　爆笑の少女たち。どこまで行っても、睾丸の受難など他人事だ。

　なにせ、ついていないのだから。

　と、しばらく笑うと、さすがに外聞を考え出す少女たち。

　周りは女ばかりとは言え、一様外なのだ。

「いや……さすがにおキャン玉が潰れたら治らない時代なら、笑ってないよ？」

「そうそう、かわいそうだと思うよ。ねえ」

「でも、今はねえ」

「そうそう、タ〇キンぐらい治るんだから。一瞬だよ一瞬。私もこの前痴漢野郎のタ〇キン潰したんだけど」

「ちょっと何してるのよ！　ぎゃはははは！」

「いや、こう、夜道歩いてたら抱き着いてきたんで、膝で蹴ったら……はぐうううう！　って急に苦しみだして転がりまわってさ」

「演技うまっ！」

　腰を引き、股間を押さえて口をしゃちほこのようにする少女に手を叩く少女。ちら、と本物のほうを見る。

「な、なんだよ」

「いや、実際ぶら下げてらっしゃる、プロキ〇タマからみて、この子の演技どうかなって」

「プロキ〇タマって！」

「ざ、ざけんなよ、マジで痛いんだよ！」

「ふざけてないって、よく見てるから真似できるのよ！」

「そうそう！」

　げらげら笑う少女たちと、妙な羞恥で顔を真っ赤にしてうつむくヤンキーたち。

　股間を押さえて転がっている者すら、顔を赤らめている。

「まあ膝金したんだけどね？　おぐううう！　でしょ？　逃げようかと思ったんだけど、そいつ**なんか死にそう**だからさ、仕方ないからズボン下ろしてみてやったら、これが変態野郎特有のデ〇チンの持ち主で……」

「そうそう、変態とかキモオタに限ってチ〇ポデカいのよね！　**お前らどうせ使わねえだろ**って話なのに！」

「玉もデカかったんだけど、上手いこと片方潰れててね。片金ってやつ」

「片金って響き最高なんだけど！　カ・タ・キ・ン！」

「そっちの彼、大丈夫かなあ？」

「大丈夫大丈夫、軽く蹴っただけだから」

「やっぱ蹴ってんじゃん！」

「いや、事故事故」

「こ、このガキ、やっぱりわざとか！」

　しゃがんだ榊に掴みかかるヤンキー。

　襟首をつかんで引き上げる。榊は立ち上がりつつ、膝蹴り。ゴリっと、ヤンキーの股間にめり込む小ぶりな膝。

「はぐっ！」

　目を見開き、歯を剥くヤンキー。怖い顔だが、周りの少女らは誰一人怖いなどとは感じていなかった。

　指さして笑う。

「いきなりキ〇タマ！」

「ぎゃはははははははは！　もろイった！　もろイった！」

「今度は二個とも行ったんじゃね？」

「去勢ってやつ？　男として、終わった？」

「っていうか今のは油断しすぎでしょ」

「男同士ならタマタマは狙わないんだろうけど……女の子と喧嘩するときは真っ先に狙われるよ？だってこっちにはついてないんだし。その**ハンデ玉**」

　ヤンキーの股間を指さす。指されて、慌てて股間を庇うヤンキー。

「は、ハンデって……」

「ハンデじゃんー、指さされただけで「ヤベエ！」って女の子なありえないよ？」

「そうそう、指さすどころか、同じとこ蹴り返されても平気だから、安心して蹴れるもんねー」

　パンパン、とスカートの前を叩く。平気で叩く。ビク、と体を強張らせるヤンキーを見て、声を挙げて笑う少女たち。

「どのぐらい痛いかわかんないからこれといって遠慮もあれだしね」

「治らないなら怖いけど、治るなら男の子停止させるスイッチ程度にしか思えないしね」

　ゲラゲラ笑いまくる少女たち。

　ヤンキーの怒号に怯えていた者たちとはとても思えなかった。

　強大に見えた男たちが、男だからこその弱さであっさり地面に転がるのを見て、何かに目覚めたのか。

　自分たちの、同じことには絶対にならないという優位に気づいたのか。

　それとも、ただ何となく楽しいだけか。

　ここはうさぎ県、金責めなどを好むドＳ女性の割合が世界一多いといわれる土地である。

　であるから、金責めでギャラリーの女子たちが盛り上がるのは、ごく当然のことといいえるかもしれない。

　もはやヤンキーたちはナンパだとか、邪魔した奴への仕返しなど考える余地はない。

　ただ、睾丸を守りつつ逃げるしかない状況だが、逃げられる可能性はかなり低そうだった。

体験版終わり

ヤンキーたちはこの金的責めを食らい、少女らに土下座します。

少女らは寛容さを見せ、お仕置きに金踏み潰しをする程度。

……玉が治るのをいいことに「寛容」の意味が歪む行動をとる少女らですが、

そのシーンは会話で語られるのみ、次の場面はもう学校です。

続きは製品版でお楽しみください